

# 緑地探訪 大岐海岸の海岸林 (高知県土佐市)

中島有美子

国際航業株式会社 (y.nakajima213@gmail.com)

大岐海岸の海岸林は高知県土佐清水市の大岐海岸に位置する広葉樹からなる海岸林である。大岐海岸は約 1.6 km の海岸砂丘地で、幅約 100 m の砂浜があり、砂浜に隣接して林帯幅約 200 m、延長約 1.3 km の海岸林が成立している。

この海岸林で最も印象的だったのは樹木の大きさであり、林帯の内陸側では樹高 20 m、胸高直径 1.5 m を超えるクスノキやタブノキなどの巨木が生育していた。自分が調査してきた広葉樹の海岸林では、大きな個体でも胸高直径は 40 cm 程度だったので、とにかくその大きさにまず驚いた。また、広葉樹の海岸林は潮風等に晒され細々と樹冠を広げているような個体が多い印象があった。大きく樹冠を広げている巨木の下に立つと、ここが海岸林であることを忘れそうだった。

大岐海岸の海岸林の歴史をみると、江戸時代初期はマツが植栽されたとされ<sup>4)</sup>、1906年の地形図<sup>3)</sup>では海岸林全体が針葉樹とされていることから、当初は海岸林全体がマツ林だったものと考えられる。その後、マツは 1950年代頃よりマツ材線虫病により大量枯死したとされ<sup>1)</sup>、地元住民によると 2006年頃にマツはほぼ消失したという。現在生育する広葉樹は、汀線側の幅約 30 m の範囲に植栽されたトベラ、シャリンバイ、マサキ等からなる低木林を除いて植栽記録はないことからほぼ自然侵入したのと考えられる。

林内を歩くと優占種や林分構造が汀線側から内陸側に向かい変化することが分かる。高木層の優占種は低木種からヒメ

ユズリハ、ヤブニッケイ、クスノキ・タブノキと主に移り変わっていく。また、林分構造は汀線側の身動きが全くとれないほどの高密度で樹高の低い林分から、徐々に低密度で樹高の高い林分に変化する。こうした相観の違いについて、森定ら<sup>2)</sup>は植生調査や過去の空中写真の判読等から、マツ材線虫病とその後の森林管理の違いが影響していることを示している。

広葉樹の海岸林は従来のマツの海岸林と比較して、潮風等に対する耐性が低く、防災林としての機能が維持できるかが懸念されている。様々な歴史を経て、本来の生育環境ではないと考えられる砂浜に見事に成立しているこの海岸林が、今後どのように変化していくのか見ていきたいと思う。

## 引用文献

- 1) 松岡泰洪 (1992) 大岐浜林裁判資料,大岐浜林被告橋本 田鶴子さん (その他有志) を支援する会,391pp
- 2) 森定 伸・野崎達也・小川みどり・鎌田磨人 (2020) 高知県大岐浜におけるクロマツ林から照葉樹林への遷移過程, 景観生態学会誌, 25(1): 75-86.
- 3) 参謀本部陸軍部測量局 (1906) 五万分一地形図土佐清水.1pp
- 4) 土佐清水市史編纂委員会 (1980) 土佐清水市史下巻.1046pp



写真左：上空から臨んだ大岐海岸の海岸林。写真右上：林内の踏査の様子。写真右下：巨木が楽しめる散策路もある。